

はしがき

三宅 明正

この研究プロジェクトは2012年度に発足した。もともとは現代日本における特定の経営者の軌跡を、その行動と思想に即して考察しようとする高橋の関心を軸にしながら、より広げて、歴史における個人史研究の意味を再検討してみようというのが共通の関心であった。もともと特定の人物に焦点を当てることは、歴史の把握においてしばしばなされてきていたことである。ただしその場合、対象となる人物は為政者など多数の人びとに大きな影響を与える存在であり、またその人物個人の役割や能力に関心が集中し、かつそれに傾斜した評価がなされる傾向があった。19世紀半ば以降の近代歴史学においてもそのような傾向は継続した。

しかし20世紀になると、個人の歴史はその人物の生きた時代の社会や文化との関わりでとらえられるようになった。さらに対象とする個人の範囲がいきよに広がった。本報告書では、小川の「近現代史における個人史研究の射程に関するメモ的ノート」が、社会との関わりで個人史を対象とする意義を改めて述べている。

報告書にはそうした社会との関わりを意識して個人史を取り上げた論考が、史料紹介を含めて5点収録されている。長谷川亮一「『中ノ鳥島』の探検者・大平三次の伝記のための覚書」は、民権運動家から投機的実業家に転じた大平三次（1987年頃から1934年）という人物に関して現在判っていることをまとめたものである。岡野孝信「生活と勤務（仕事・医療）に根をおいた闘争を」——須田朱八郎と戦後医療労働運動は、敗戦後初期の医療労働運動でリーダーシップを発揮した医師・須田（1911年から1969年）の生涯を跡づけている。これらはいずれも顧みられることの少なかった人物の研究に先鞭をつけたものである。高橋莞爾「企業者史の再論を試みる」は、渋沢栄一から稲盛和夫まで5人の電気関連産業の経営者を、企業者として扱い、「企業者史」という研究分野の意義を唱えている。高木晋一郎「地元の芸術家と住民との“接点”としての個人美術館」は、市川市にある東山魁夷記念館を素材にして、個人史と地域社会・文化のかかわりを扱ったものである。また鳥羽厚郎による史料紹介は、水野広徳の日本海軍に関する英文著作を翻訳し、その思想の解明に資そうとしたものである。いずれの論考も、それぞれのテーマに関する現在の時点での一つの到達を示していると思われるので、一読をお願いする。

最後に、個人史の研究が、今日の歴史学のありように関する重要な論点を提起していることにふれておこう。『歴史評論』2015年1月号はそれを特集にして編まれている。そこでも言及されているアメリカのフランス革命史家リン・ハントは、グローバリゼーションの時代の歴史学に関して、次のように述べている（Lynn A. Hunt, *Writing History in the Global Era*. W. W. Norton, 2014）。すなわち、個人史の研究を通して人びとが時代の大きな変化をどのように感じていたかを知ることができれば、私たちはグローバリゼーションの影響や結果を私たちはもっとよく理解できるはずである、と。